

令和4年度懸賞論文受賞者を決定(報告)

(公財)九州運輸振興センター

懸賞論文募集は、九州圏における交通・観光事業の発展及び地域社会の活性化に寄与することを目的に、平成25年度から開始し本年度で10回目となります。本年度も大学の先生等の支援、ご協力を頂き、九州内外5大学から5件の応募がありました。

応募のありました論文は、令和4年12月26日に開催しました「懸賞論文審査委員会」において審査を行った結果、以下の通り優秀賞2編が決定されました。

(なお本年度は最優秀賞該当者無し)

【優秀論文】

受賞者 下山美羽、七井望海、森華乃子 (共同執筆)
大学等名 和歌山大学 観光学部
テーマ 地域鉄道の廃線を食い止めるための施策提案
～鉄道事業者の自助努力で改善可能な要素とは～

受賞者 戸石川幹太、上田陽輝、三輪浩人、林田有希子、畠山紀誠 (共同執筆)
大学等名 福岡大学 商学部
テーマ 祭りと地域振興
－「呼子くんち」復活にみる祭りの役割－

優秀賞の「地域鉄道の廃線を食い止めるための施策提案」は、丁寧な先行研究の確認、地方鉄道各社に積極的にインタビューする等実践的な検討がされ、その結果を踏まえ域外からの観光客の誘致の必要性など論理的に考えをまとめられています。しかし、その提案には新規性には欠けるため、新たな視点からの提言などが、あればさらによかったと思われます。

同賞「祭りと地域振興」は、九州北部の「くんち」に焦点をあてた点は面白く、関係者への入念なヒアリングを行い「くんち」の実施状況や「呼子くんち」復活までの状況と課題がよくまとめられた興味深い研究と考えます。全国各地で共通する担い手不足の課題を扱っており、「祭り」をきっかけとする地域振興の提案があればさらに良い論文となったと思われます。といった意見が委員会において出されました。

これらの優秀賞は、後日、当センターホームページ及び九州うんゆジャーナルに論文要旨を掲載することにしております。

なお、受賞者に対して、令和5年2月22日(水)、当センター青柳俊彦会長より表彰状と副賞(優秀賞各5万円)が授与されました。

(参考)

○ 懸賞論文審査員会委員名

星野 裕志	九州大学 大学院 経済学研究院 教授
千 相哲	九州産業大学 副学長 教授
辰巳 浩	福岡大学 理事 工学部部長 教授
近江 貴治	久留米大学 商学部 准教授
西畑 知明	九州運輸局 観光部 部長
大黒伊勢夫	(公財)九州運輸振興センター 理事

なお、受賞論文の要旨については、以下に掲載しております。

○令和4年度懸賞論文受賞者（授賞式2023年2月22日）



地域鉄道の廃線を食い止めるための施策提案

～鉄道事業者の自助努力で改善可能な要素とは～（要旨）

下山美羽

七井望海

森華乃子

地域鉄道の集客を改善するために鉄道事業者が改善可能な要素はなにがあるか。地域鉄道の乗客数に影響を及ぼす要因について、先行研究から①列車本数②駅間距離③特急運行の有無④お得な切符の有無が挙げられた。また、近年の鉄道情勢から我々は、⑤ラッピング電車⑥ICカードの導入⑦女性専用車両の有無も重視すべき要素だと考えた。しかし、すべての先行研究でこれらの要因が調査されているのではなく、研究によっては反対の結果を出した要因もある。これらの要因は乗客数に影響を与えるのではなく、乗客数の変化によって決定付けられるという逆の因果関係であることも考えられる。

本研究の目的は、地域鉄道事業者が乗客数を増やすために改善可能な要素を明らかにし、九州地域における地域鉄道の集客改善に向けた具体的な提案を示す事である。数値だけで地域鉄道の実情を把握することは難しいため、九州地方の地域鉄道事業者5社を対象にインタビュー調査を行った。その結果、①列車本数②駅間距離③特急運行の有無⑦女性専用車両の有無は乗客数によって決定付けられることがわかった。⑥ICカードは3社が導入、⑤ラッピング電車④お得な切符の有無は5社すべてが導入している。少子高齢化の影響で学生の数が減少している中で、定期外旅客の獲得にも注目していることが明らかになった。

我々は、定期外旅客を「鉄道を利用しない沿線住民」・「他地域からの観光客」に分けて考え、前者には自動車免許返納済み高齢者に対する乗車料金割引を、後者には各駅・各車両PayPay導入を提案する。今後は、更なるデータ分析を重ねて費用対効果を調べ、施策の実現可能性を検討する必要がある。

(キーワード：地域鉄道、定期外旅客、乗客数、沿線住民、観光客)

論題「祭りと地域振興－「呼子くんち」復活にみる祭りの役割－」（要旨）

氏名 戸石川 幹太
上田 陽輝
三輪 浩人
林田 有希子
畠山 紀誠

祭りには地域にとっていろいろな役割を担っている。地域の文化や伝統を表すもの、祭りを通じて地域コミュニティの力を高めるもの、そして観光資源として地域振興につながるものなどである。祭りには大規模なものから、集落などをベースにした小規模なものまでであるが、役割のウェイトには違いはあるだろうが、上記の役割は共通している。

しかしその祭りが危機的状況にある。全国的な人口減少と少子高齢化により、祭りの担い手が不足し、特に規模の小さい祭りの多くが存亡の危機に直面している。地域の祭りがなくなると、地域のつながりや連帯は弱まり、地域の衰退はさらに加速すると考えられる。

そこで本研究では、九州北部で秋祭りとして盛んに行われている「くんち」に着目し、まずは地域密着型の祭りが今どのような困難に直面しているのかを分析した。そして打開策を考えるために、33年ぶりに復活する佐賀県唐津市呼子町の「呼子くんち」をめぐる地域住民の想いや活動を調査し、地域で祭りを守る意義と難しさ、そして地域振興における祭りの役割と課題について考察した。

地域の祭りは地域振興にとって、非常に重要な役割を担っている。例えば、祭りを協働して成功させることで、人と人のつながりを強める効果が期待できるという点、祭りを通じて地域活性化を図ることができる点である。衰退しつつある地域で祭りを守ることは多くの課題がある。地域によっては伝統を変えてまで祭りを守るべきではないという意見もある。しかし祭りがなくなれば、その地域はさらに衰退するかもしれない。そのため担い手である若い世代の力を確保するために時代に合わせて柔軟に対応すること、また行政も地域の祭りを支える仕組みを考え、地域とともに工夫を行っていくべきだと考える。

キーワード：祭り、地域振興、観光振興、人口減少、少子高齢化

○令和4年度第1回懸賞論文審査委員会（2022年4月19日）



○令和4年度第2回懸賞論文審査委員会（2022年12月26日）

